



No. sma0055

(2022.1.13)

サントリー美術館
「大英博物館 北斎—国内の肉筆画の名品とともに—」開催

会期：2022年4月16日（土）～6月12日（日）



為朝図 葛飾北斎 一幅

江戸時代 文化8年（1811） 大英博物館

1881,1210,0.1747 © The Trustees of the British Museum



富嶽三十六景 神奈川沖浪裏 葛飾北斎 横大判錦絵

江戸時代 天保元～4年（1830～33）頃 大英博物館

2008,3008.1.JA © The Trustees of the British Museum

サントリー美術館（東京・六本木／館長：鳥井信吾）は、2022年4月16日（土）から6月12日（日）まで、「大英博物館 北斎—国内の肉筆画の名品とともに—」を開催いたします。

江戸時代後期を代表する浮世絵師・葛飾北斎（1760～1849）は、世界でも最も著名な日本の芸術家の一人です。《富嶽三十六景》や『北斎漫画』など、一度見たら忘れられないインパクトを持つ作品の数々は、国内外で高い人気を誇っています。

北斎と海外との関係については、モネ、ドガ、ゴッホら印象派およびポスト印象派の画家たちによる北斎への傾倒や、フランスを中心としたジャポニスムへの影響が有名ですが、イギリスにも多くのコレクターや研究者がおり、その愛好の歴史は19世紀まで遡ることができます。なかでも大英博物館には、複数のコレクターから入手した北斎の優品が多数収蔵されており、そのコレクションの質は世界でもトップクラスです。

本展では、この大英博物館が所蔵する北斎作品を中心に、国内の肉筆画の名品とともに、北斎の画業の変遷を追います。約70年におよぶ北斎の作画活動のなかでも、とくに還暦を迎えた60歳から、90歳で亡くなるまでの30年間に焦点を当て、数多くの代表作が生み出されていく様子をご紹介します。また、大英博物館に北斎作品を納めたコレクターたちにも注目し、彼らの日本美術愛好の様相を浮き彫りにします。

《見どころ》

1. 貴重な初期作と、晩年の代表作

北斎の揃物の名品は、その多くが70歳を過ぎてから制作されました。たとえば、風景版画の名手としてのイメージを決定づけた《富嶽三十六景》は、数え71歳から74歳頃の作品と考えられており、晩年になっても尽きることのない北斎の創作意欲を感じさせます。その後、立て続けに刊行された《諸国瀧廻り》や《諸国名橋奇覧》のシリーズは、《富嶽三十六景》と同じ西村屋与八から出版されており、北斎の独特な風景描写が広く人気を博していた様子がうかがえます。一方で、「春朗」という画号で活動していた初期の作品《市川蝦蔵の山賤実は文覚上人》からは、人物の動きを捉える巧みなバランス感覚が見て取れ、画業の最初期からすでに才能を開花させていたことが分かります。本展では、大英博物館の所蔵する揃物の優品や、現存数の少ない貴重な初期作をご紹介します。

2. 肉筆画の名品

北斎が直接筆を執った肉筆画には、彼の卓越した画力と大胆な発想力が遺憾なく発揮されています。肉筆画は40代から50代半ばと、75歳頃から没年までの2期に多く描かれており、とくに前者では美人画の優品、後者では幅広い画題に挑戦をした意欲作が次々と生み出されました。代表作《流水に鴨図》(大英博物館)は88歳の作品ですが、水上と水中の様子を対比的に描き分ける巧みなテクニックには、一切筆の衰えが感じられません。年齢が記された肉筆画のなかでは88歳が最も多く、最晩年になっても常に高みを目指し続けていたことが分かります。また、暗闇に浮かび上がる鬼と弘法大師の姿が強烈なインパクトを残す《弘法大師修法図》(西新井大師總持寺)は、晩年期の作品では最大級で、80代後半になってもなお気力と体力に満ち溢れていた北斎の姿が浮かび上がってきます。本展では、大英博物館および国内所蔵の肉筆画の名品を通して、天才絵師・北斎の真骨頂をご覧ください。

3. コレクターと大英博物館

大英博物館が所蔵する北斎作品は、様々なコレクターからの譲渡によって、質・量ともに充実していきました。華やかな錦絵や肉筆画はもちろんのこと、版本、摺物、版下絵など、北斎の多岐にわたる作画活動を網羅しており、それぞれのコレクターや研究者の優れた審美眼が、世界有数の北斎コレクションを築き上げました。なかでも、外科医ウィリアム・アンダーソン（William Anderson、1842～1900）と小説家アーサー・モリソン（Arthur Morrison、1863～1945）の果たした役割は大きく、彼らの蒐集品は大英博物館における日本絵画コレクション全体の礎となりました。アンダーソンは著作『日本の絵画芸術（“The Pictorial Arts of Japan”）』のなかで、自身が所蔵していた《為朝図》を取り上げ、北斎の芸術的才能や作品に表れる精神性・知性を高く評価しています。そして、《流水に鴨図》や《若衆図》などの重要作品を所蔵していたモリソンもまた、著作『日本の画家（“The Painters of Japan”）』で北斎について言及し、その幅広い画域を称賛しています。加えて、研究面で北斎コレクションを支えたのが、詩人であり大英博物館のキュレーターでもあったローレンス・ビニヨン（Laurence Binyon、1869～1943）です。ビニヨンは《百人一首姥がゑるとき》や《詩哥寫真鏡》といった代表的な版画の揃物を購入し、博物館のコレクションをより成長させただけでなく、アンダーソン・コレクションを整理し、数多くの日本美術関連の著作を執筆するなど、イギリスにおける日本美術研究に多大なる功績を残しました。本展では、6人のコレクターおよび研究者に着目し、旧蔵品や著作、関連資料などを通して、イギリスにおける北斎愛好にも焦点を当てます。

《 展示構成 》

第1章：画壇の登場から還暦



市川蝦蔵の山賤実は文覚上人 葛飾北斎 細判錦絵

江戸時代 寛政3年（1791） 大英博物館

1914,0110,0.2 © The Trustees of the British Museum

北斎は、安永7年（1778）頃、当時役者絵で知られていた浮世絵師・勝川春章に入門し、「春朗」と名乗りました。師と同様、歌舞伎を題材とし、勝川派特有の様式で役者絵などを描きました。

師の没後は勝川派を去り、寛政6年（1794）から4年間ほど、北斎は「宗理^{そうり}」と名乗ります。それは、俵屋宗達や尾形光琳ら、いわゆる「琳派」に連なることを宣言するものでした。北斎作品の主題と様式の幅は広く、日本や中国の様々な様式、および当時日本に導入されたばかりのヨーロッパの技法を学び、浮世絵ではそれまで主要ジャンルではなかった風景をも主題として、実験的な試みを開始しました。

「北斎」という、今日最も知られた号を名乗り始めたのは寛政10年（1798）、39歳の時で、以後は特定の流派に属さず、独自の芸術を追求していきます。とくに40代、50代は肉筆美人画や読本挿絵の依頼が殺到し、成功を収めました。

そして50代に入ると、新たに「戴斗^{たいと}」という号を名乗りますが、これは「北斗七星を戴く」という意味で、日蓮宗の信者であった北斎の深い信仰心を表しています。さらに、数え61歳を迎えると、号を「為一^{いっ}」と改めますが、世界と「一（つ）と為し、再び「一（歳）と為る」、という意味が込められています。

【主な出品作品】

- ・市川蝦蔵の山賤実は文覚上人 葛飾北斎 細判錦絵
江戸時代 寛政3年（1791） 大英博物館
- ・梅樹図 葛飾北斎 一幅
江戸時代 寛政7～10年（1795～98）頃 大英博物館
- ・為朝図 葛飾北斎 一幅 江戸時代 文化8年（1811） 大英博物館

第2章：富士と大波



富嶽三十六景 凱風快晴 葛飾北斎 横大判錦絵
江戸時代 天保元～4年（1830～33）頃 大英博物館
1906,1220,0.525 © The Trustees of the British Museum



千絵の海 総州利根川 葛飾北斎 横中判錦絵
江戸時代 天保4年（1833）頃 大英博物館
1930,1112,0.5 © The Trustees of the British Museum

江戸時代には、富士を神聖な存在として捉える富士信仰が盛り上がりを見せており、北斎もまた、富士を崇高な山として敬愛していました。作品でも何度も富士を取り上げており、70歳になると富士がより中心的なモチーフとなっていきます。輸入された藍色の色料、プルシアンブルーを使用した、『富嶽三十六景』のシリーズは、北斎のそれまでの画業の集大成となりました。

その後、天保5年（1834）には、号を卍（「万事」「あらゆること」の意）に変更するとともに、富士をデザインにした新しい印章を使い始めました。卍の号と富士の印章の両方を用いた最初の作品のひとつは、版本の傑作『富嶽百景』です。《富嶽三十六景》は、様々な人間模様のなかに、不動の存在としての富士を配置しましたが、『富嶽百景』では、富士の権威は俗世を超えるものとして捉えられました。

富士と並んで、北斎が人生を通じて魅かれたのは、多様な水の造形です。川や滝、海、とりわけ波は、年を重ねるごとにさらに大胆で動的なものになりました。《富嶽三十六景 神奈川冲浪裏》を始め、北斎は生涯をかけて、水の表現を追求しました。

【主な出品作品】

- ・ 富嶽三十六景 神奈川冲浪裏 葛飾北斎 横大判錦絵
江戸時代 天保元～4年（1830～33）頃 大英博物館
- ・ 富嶽三十六景 凱風快晴 葛飾北斎 横大判錦絵
江戸時代 天保元～4年（1830～33）頃 大英博物館
- ・ 千絵の海 総州利根川 葛飾北斎 横中判錦絵
江戸時代 天保4年（1833）頃 大英博物館

第3章：目に見える世界



諸国瀧廻り 和州吉野義経馬洗滝 葛飾北斎 大判錦絵
江戸時代 天保4年（1833）頃 大英博物館
1937,0710,0.195 © The Trustees of the British Museum



諸国名橋奇覧 飛越の堺つりはし 葛飾北斎 横大判錦絵
江戸時代 天保5年（1834）頃 大英博物館
1937,0710,0.181 © The Trustees of the British Museum

北斎は人間や自然をつぶさに観察し、「もののかたち」をとらえる技を磨きました。しかし、ただ現実を描写することを目的としていた訳ではありません。北斎は、花鳥画や名所絵の長い伝統を踏まえつつ、やがてそれらから決別していきます。北斎の「自然」は、文学的連想や文化的含意によって、表面的な表現以上の意味を持つようになりました。

加えて、江戸時代には交通網が整理され、名所図会などのガイドブックが多数出版されるなど、日本各地の情報が以前よりも入手しやすくなったため、北斎ら絵師たちは、風景を描くために必ずしも現地を訪れる必要はなくなりました。また、作品の制作意図としても、实景の記録を作ろうとしていた訳ではありませんでした。有名な《諸国瀧廻り》のシリーズには、北斎がよく知った場所と、訪れたことがなかった（かもしれない）場所、有名だが行くことのできない場所を想像して描いたものも含まれています。北斎にとって風景画は、頭に浮かんだヴィジョンを形にする場でもありました。

北斎は、すべての現象には魂があり、互いにつながっているという、仏教の思想を表現することを目指していました。北斎の筆は、日常に神秘を見出し、それによって形而上の世界と交わり、その様相を人々に伝えようとしたのです。

【主な出品作品】

- ・ 諸国瀧廻り ^{わしゅうよしの よしつねうまあらいのたき} 和州吉野義経馬洗滝 葛飾北斎 大判錦絵
江戸時代 天保4年（1833）頃 大英博物館
- ・ 諸国名橋奇覧 ^{ひえつ} 飛越の堺つりはし 葛飾北斎 横大判錦絵
江戸時代 天保5年（1834）頃 大英博物館
- ・ 芥子 ^{けし} 葛飾北斎 横大判錦絵
江戸時代 天保2～3年（1831～32）頃 大英博物館

第4章：想像の世界



小野小町 葛飾北斎 大判錦絵
江戸時代 文化中期（1809～13）頃 大英博物館
1860,0414,0.321 © The Trustees of the British Museum



百物語 こはだ小平二 葛飾北斎 中判錦絵
江戸時代 天保4年（1833）頃 大英博物館
2016,3015.2 © The Trustees of the British Museum

江戸時代の日本では、中国文化がいたるところに存在していました。絵画様式の基礎や画題の多くは、いずれも中国から入ってきたものです。そして北斎は日本と中国の文化の両方に造詣が深く、とくに和漢の偉大な歌人や詩人、歌や詩に詠まれた情景をしばしば絵画化しています。北斎は型に捕らわれない自由な発想で、独自の解釈を加えた新しい文学イメージを生み出しました。

また、信仰や幻想など、目に見えないテーマであっても、北斎は想像力を駆使し、現実感のある描写へと仕上げています。たとえば《百物語》の妖怪たちは、まるで目の前にいるかのようなリアリティを持っています。北斎は高齢になっても、道釈人物や神、恐ろしい幽霊などをしばしば取り上げ、芸術の力でそれら呼び覚まし、世に解き放ちました。

北斎は、現実の世界と想像の世界をたやすく行き来することができた稀有な絵師といえるでしょう。

【主な出品作品】

- ・ 小野小町 葛飾北斎 大判錦絵
江戸時代 文化中期（1809～13）頃 大英博物館
- ・ 詩哥寫真鏡 李白 葛飾北斎 長大判錦絵
江戸時代 天保4～5年（1833～34）頃 大英博物館
- ・ 百人一首うばがゑとき みなもとのむねゆき あそん 源 宗于朝臣 葛飾北斎 横大判錦絵
江戸時代 天保6～7年（1835～36）頃 大英博物館
- ・ 百物語 こはだ小平二 葛飾北斎 中判錦絵
江戸時代 天保4年（1833）頃 大英博物館

第5章：北斎の周辺



漁師図 葛飾北斎 色紙判摺物
江戸時代 文政期（1818～30）頃 大英博物館
1906,1220,0.479 © The Trustees of the British Museum

浮世絵版画の制作は、版元・絵師・彫師・摺師から成るチームの密接な連携作業によって行われました。北斎の作品は、制作に関わる者と共に仕事をし、彼らから学ぶことによって、より高いレベルに到達しました。一方で北斎は、自分が習得したことは惜しみなく人に伝えようとしていました。北斎にとって絵とは、閉鎖的なものではなく、世界とつながる手段であり、一部の社会のみならず、すべてに開かれているものでした。

高年の北斎と一緒に住み、共同制作を行っていたのが、娘のお栄（画号「応為」）です。お栄がいつから一緒に住むようになったか、はっきりとはしませんが、北斎が60代後半から70歳の頃と思われます。北斎の制作にお栄がどのように関わったのかは謎ですが、「北斎」の作とされている作品の多くに助力していたことは確かでしょう。

北斎は意識的に、自分の技法と世界観をすべての人々と共有しようとしていました。門弟たちの手本および入門書として肉筆画帖を制作し、時には絵手本として版行しました。彼の絵手本の多くに「伝神開手^{でんしんかいしゅ}」という副題が付けられているように、北斎の作品と思想を支えているのは、万物の精神を伝えたいという内なる欲求でした。

【主な出品作品】

- ・漁師図 葛飾北斎 色紙判摺物
江戸時代 文政期（1818～30）頃 大英博物館
- ・『女重宝記』 葛飾応為 大本一冊 江戸時代 弘化4年（1847） 大英博物館

第6章：神の領域—肉筆画の名品—



流水に鴨図 葛飾北斎 一幅

江戸時代 弘化4年（1847） 大英博物館
1913,0501,0.320 © The Trustees of the British Museum



弘法大師修法図 葛飾北斎 一幅

江戸時代 弘化年間（1844～47） 西新井大師總持寺

肉筆画は、彫師・摺師との連携で作られる版画とは違い、絵師の息づかいが直に感じられる点に特徴があります。北斎の肉筆画制作のピークは、40代から50代半ばと、75歳頃から没年までの2期で、いずれの作品からも、確かな絵画技術と豊かな想像力が感じられます。

最晩年はとくに制作の中心を肉筆画へと移します。『富嶽百景』の跋文で北斎は、自ら描く絵が100歳で「神妙の域」に到達し、110歳で「一点一格にして生きるがごとくならん」と述べていますが、その言葉も肯けるほど、一点一点が独特の迫力を宿しています。弘化4年（1847）に88歳となり、少しでも命を永らえて絵を極めたいという思いはさらに切実となりました。北斎は「百」と彫った大きな印を新しく作り、以後その印章のみを使用しました。北斎が亡くなったのはその2年後です。これらの最晩年の作品は、絵の力を信じた北斎が、その実現に捧げた畢生の集大成であり、最後の熱狂的な挑戦であったのです。

本展を締めくくる本章では、壮年期から最晩年までの肉筆画の名品を通して、絵画制作と真摯に向き合い続けた北斎の姿を追います。

【主な出品作品】

- ・流水に鴨図 葛飾北斎 一幅 江戸時代 弘化4年（1847） 大英博物館
- ・鯉亀図 葛飾北斎 一幅
江戸時代 文化10年（1813） 埼玉県立歴史と民俗の博物館
- ・白拍子図 葛飾北斎 一幅 江戸時代 文政3年（1820）頃 北斎館
- ・弘法大師修法図 葛飾北斎 一幅
江戸時代 弘化年間（1844～47） 西新井大師總持寺
- ・渡船山水図 葛飾北斎 一幅 江戸時代 弘化4年（1847） 北斎館

【本展における展覧会関連プログラム】

◎学芸員による展示レクチャー

展覧会担当学芸員が詳しく展示作品を解説（スライド使用）

日時：2022年4月24日（日）、5月22日（日）

各日11時～、14時～（各回約40分）

参加無料（別途要入館料）／事前申込優先

※当館ウェブサイトよりお申込みください。先着順。空席がある場合に限り、当日参加可能です。

◎その他のプログラムも決定次第当館ウェブサイトでご案内します。

※変更・中止の場合があります。詳細および最新情報は当館ウェブサイトをご覧ください。

サントリー美術館
「大英博物館 北斎—国内の肉筆画の名品とともに—」開催

- ▼会 期：2022年4月16日（土）～6月12日（日）
※作品保護のため、会期中展示替を行います。
※会期は変更の場合があります。最新情報は当館ウェブサイトでご確認ください。
- ▼主催：サントリー美術館、大英博物館、朝日新聞社
- ▼協賛：三井不動産、三井住友海上火災保険、ダイキン工業、
サントリーホールディングス
- ▼協力：日本航空
- ▼会場：サントリー美術館
東京都港区赤坂9-7-4 東京ミッドタウン ガレリア3階
〈最寄り駅〉 都営地下鉄大江戸線六本木駅出口8より直結
東京メトロ日比谷線六本木駅より地下通路にて直結
東京メトロ千代田線乃木坂駅出口3より徒歩約3分

【基本情報】

- ▼開館時間：10時～18時
※金・土および4月28日（木）、5月2日（月）～4日（水・祝）は20時まで開館
※いずれも入館は閉館の30分前まで
※開館時間は変更の場合があります。最新情報は当館ウェブサイトでご確認ください。
- ▼休館日：火曜日（5月3日、6月7日は開館）
- ▼入館料：
・当日券：一般1,700円、大学・高校生1,200円、中学生以下無料
・前売：一般1,500円、大学・高校生1,000円
※サントリー美術館受付、サントリー美術館公式オンラインチケット、ローソン
チケット、セブンチケットにて取扱
※前売券は1月26日（水）から4月15日（金）まで販売
※サントリー美術館受付での販売は開館日に限る
- ▼割引：
・あとろ割：国立新美術館、森美術館の企画展チケット提示で100円割引
※割引適用は一種類まで（他の割引との併用不可）

▼呈茶席（お抹茶と季節のお菓子）

日 時：4月21日（木）・28日（木）、5月5日（木・祝）・19日（木）、
6月2日（木）

12時、13時、14時、15時にお点前を実施
（お点前の時間以外は入室不可）

会 場：6階茶室「玄鳥庵」 定員：各回12名／1日48名

呈茶券：1,000円（別途要入館料）

※呈茶券は当日10時より3階受付にて販売（予約不可、先着順で販売終了、お一人様
2枚まで）

※変更・中止の場合があります。詳細および最新情報は当館ウェブサイトをご覧ください。

▼一般お問い合わせ：03-3479-8600

▼美術館ウェブサイト：<https://www.suntory.co.jp/sma/>

▽プレスからのお問い合わせ：〔学芸〕池田 〔広報〕光田

http://www.suntory.co.jp/sma/info_press/

▽プレス用画像のお申込み：「大英博物館 北斎」広報事務局（株式会社ウインドム内）

TEL : 03-3639-0721

E-mail : hokusai2022@windam.co.jp

以 上